

## 今井原のカラス

中島八十一

先に續き、長野市善光寺平の一角にある今井原の自然である。花も咲けば蛇も出るこの千曲川と犀川に區切られた一帯には水田もあれば畑もある。水に恵まれ稲作が可能であればこそ、武田にも上杉にもその値打ちを十分すぎるほどに知られたことであらう。

今時の農家に質せば、米は家族で食べるぐらゐの生産量であるが、自らは晝食にパンを買って食するぐらゐで、食べきれない分はJAに出荷すると答へる。それではやがては水田放棄かと問へば、桃やブドウに代表される商品作物は金にはなりこそすれ、その手間がかかることには却つて継承が危ぶまれる。田んぼは樂でありいつまでも續くといふ。今井原の田はいづれも一角が流しの三角コーナーのやうに土で埋められてゐる。このコーナーは長野の特徴なのか、他の理由によるものか、東京暮らしが長くなつた身には不思議な造りとして目に映る。田植多の季節を迎へ、トラクターが苗を満載していざ田に乗り込む段になり、このコーナーがその出入り口になることを目にした。そのために収量がどれだけ減るのか知る由もないが効率のためにはそれも無視できるのだ。多分、全国の田がこのやうにコーナーを持つのであらう。他の地方では、トラクターさへあれば土地はどれだけあつても構はないとうそぶく者もある。

畑では名を初めて聞く葉物類が數多く栽培され、概ね東京のスーパーの半値で賣られる。ユキ菜、ワラビ菜、カキ菜、ワサビ菜と並べて姿、味はひの想像できる方がどれだけをられませうか。これはわづかな例に過ぎない。關心を惹くのは小麥の生産である。案の定、隣接する篠ノ井には饅飩の名品があり、そのために絶やさず麥が栽培され續けてゐる。信州イコール蕎麥は間違ひではないものの、稲作を第一等とし、續いて麥作を第二等とするのは歴史の上では當然のことであらう。したがつてこの地の饅飩にも當然それなりの歴史があるはずである。畑として見慣れないものは胡桃である。中には高さ十メートルに垂んとする大木もあるが、總じて五六メートルに詰めてある。四月末には木全體に長さ十センチに満たない細長い雄花が垂れ下がり、一週間ほどで萎れて落ちる。その後はみるみる内に青い實が二つ、三つと固まつて膨らみ始め、雌花もあつたかとその段になつて初めて気付く。

樂しみに結實を待つのは人ばかりではない。秋のある日、私は件の散歩を晝休みに始めた。大學を出る時、すれ違ふ職員はいつてらつしやいと聲を掛ける。長野の秋は早くやつては来るものの、當地で購入した衣類で身を固めれば、果たして気温など意識に上ることなどない。それに加へて昨今はマスクであり、帽子と合はせて装備としてこの上ない。田に圍まれた舗装されてゐない農道を歩むに、脇の農具小屋の上にカラスが一羽止まつてゐる。逃げもせずはこちらをぢつと見てゐる。何かを唾へてゐるのか。いよいよその小屋脇を通り過ぎる折、カラスの口から何かが放たれ、音を立ててトタン屋根の線條を轉がりびつたりといへるほど正確に私の足下に落ちた。見れば胡桃の實である。プレゼントか、欲しくはないなと思ひ、

そのまま五十メートルを歩き過ぎたところで思ふところがあり振り向いた。カラスもこちらを凝視してゐる。戻つて胡桃を踏みつけ、このぐらゐなら大丈夫かといふ大きさにする。近隣を一回りして再びその場所にやってきたところ、中身の食べられるところはきれいに片付き、殻だけになつてゐた。

(令和三年四月二十九日受附)